

会議の概要（議事録）

会 議 の 名 称	(番号) 1-49	墨田区基本構想審議会 第3部会（第1回）		
開 催 日 時	令和6年7月25日（木） 19：00から21：00まで			
開 催 場 所	すみだリバーサイドホール イベントホール			
出 席 者 数	【委員】上野武（副会長）、山本俊哉、岸成行、須藤正、杉山達雄、金谷直政、木村優太、佐藤祥子、真鍋文朗 （計9名） 【事務局】楠政策担当課長、政策担当主査（田部井）			
会 議 の 公 開 （ 傍 聴 ）	公開(傍聴できる) 部分公開(部分傍聴できる) 非公開(傍聴できない)	傍聴者数	4人	
議 題	1. 事務局からの伝達事項について 2. 第2回墨田区基本構想審議会の振り返りについて 3. 各部会自由審議			
配 付 資 料	1. 次第 2. 墨田区基本構想審議会委員名簿【資料1】 3. 第2回審議会の振り返り等【資料2】 4. 委員アンケート（区の好きなところ）【資料3】 5. 委員アンケート（区の改善すべきところ）【資料4】 6. 委員アンケート（大切にすべき理念「まち」）【資料5】 7. 委員アンケート（大切にすべき理念「ひと」）【資料6】 8. 区民ワークショップで寄せられた意見【資料7】 9. こどもから寄せられた意見【資料8】 10. 今後の部会スケジュール（事務局案）【資料9】			
会 議 概 要	第1部会、第2部会、第3部会ともに同日、同会場で実施。 はじめに、全体共有事項について、事務局から説明した。 1 事務局からの伝達事項について 事務局から資料9について説明した。 2 第2回墨田区基本構想審議会の振り返りについて 事務局から資料2から8までについて説明した。 以下、質疑応答			

(第2部会 山口委員)

墨田区に居住している外国人はすでに5%ぐらいの比率でいると思うが、そうすると比率的に考えると、手帳を所持している障害者の方より多いと思う。

外国人が部会の中のテーマとして設定されていないが、各部会で包括的に議論される内容ということでよい。

(事務局)

おっしゃるとおり、外国人の数が増えていることは先程データで示した通りである。視点は様々あると思っていて、外国人を地域コミュニティやまちづくりの中で包括的に受け入れていくべきではないかというような意見や、医療を受けるにあたっての対応、地域の教育における環境をどう整えるか、また産業における働き手という視点であったり、インバウンドを見越した場合の観光の視点であったりというところもある。

外国人という括りで第1部会、第2部会、第3部会どこに置くというところがなかなか難しかったので、あえてこの部会の中の区分分けとしては設けていない。この点データとしてお示しをさせていただいたので、それを踏まえて各部会の中で、ご議論いただいていいと考えている。

(山口委員)

承知した。

3 各部会自由審議

全体共有終了後、各部会に分かれて審議を行った。

以下、各委員の発言の要旨

(上野委員)

第3部会の部会長を務めさせていただく。私自身はアーバンデザインセンターすみだの責任者をしている。

第3部会は地域活動、まちづくり、防災・防犯、環境等に関することを議論する部会だが、本日はテーマにとらわれることなく部会の皆様が日頃思っていることや今後議論していきたいことなどについて意見交換したい。

以下、各委員の自己紹介

(木村委員)

約12年前に墨田区に移り住み、現在小学校5年生の子どもが区内の小学校に通っている。仕事は渋谷区まで通勤しているが、最近はリモートワークのため自宅で仕事をしている。起業したいと考えており、SIC(SUMIDA INNOVATION CORE)に登録し、工場見学やセミナーなどに参加している。墨田区の特徴ある人がプレゼンをする100人カイギというイベントや、第2回区民ワークショップも見学させていただき、様々な意見を聞いている中で、「循環」という言葉が思い浮かんだ。例えばワークショップでは、南北を行き来するバスが少ない、働いている人は区外が多いなどといった移動の話があった。子どもは、昔と違って学校の校庭で好き勝手遊べなくなってしまった。公園に行くとしても公園が狭くて危なっかしい。さらにボールを使えないため、子どもも移動しにくい状況にある。そういった固定されてしまっているもどかしさをワークショップなどで感じた。こうしたことから、循環というコンセプトがまちづくりの中に入るとよさそうだと感じた。

(上野委員)

循環というのは、よく言われる持続可能性とかサステナブルなどとは少し違うイメージか。

(木村委員)

持続可能な循環というよりは、活動に関する循環をイメージしている。子どもの遊びや学問、仕事、買い物などといった活動が集中型になってしまっていることによる住みづらさを様々な人の声から感じた。それを循環することによってどう解決していけるのかを知りたい。

(金谷委員)

木村委員は現在住みづらさを感じているか。

(木村委員)

どこに住んでいても一緒だと感じる。墨田区に住んでいる意味があまり感じられない。仕事はリモートワークでずっと家にいるためコミュニティとの関係性も全くない。買い物もネットで完結してしまう。なぜ墨田区なのかというのが自分の中ではない。

(真鍋委員)

墨田区に住んで 10 年になり、墨田区が好き。子どもがいて、子育て計画委員もやっているが、防犯・防災が一番大切だと思っている。墨田区で強盗や放火などの事件、ひき逃げなどの事故が起きたニュースをよく見かける。特に水害が怖いと思っている。荒川が氾濫すると、自分の住んでいる地域も浸水地域になっている。災害があっても洪水が起きないように今後の 10 年間で対策が進むといいと思う。また木造密集地帯があるため、火災が発生すると危険だと感じている。皆さんと議論をして、どうしたら安全・安心に暮らせるまちがつかれるのかを一緒に考えていきたい。

(須藤委員)

曳舟は戦争の時に燃えなかった。区がこれまで曳舟川通りなどの沿道にマンションを建設してきた結果、昔の木造住宅がどんどんなくなってきた。これによって町会の加入者が少なくなっている現状がある。

(木村委員)

京島地域の良い面としては、向島アートなどの地域活動が盛んなことである。一方でマンションが多い南部地域では、地域の交流が少ないという課題がある。木造密集地帯を解消しつつ、古き良き文化や地域交流を残していけるとよい。

(杉山委員)

30 代の頃から町会に関わっている。立川四丁目町会では、地上げによりあちこちで空き地ができてしまっている。これまでは空き地にマンションが建設されてきたが、空き地のまま活用されず、町会費が入ってこないといった事態が生じている。また地上げにより町会の役員をしていた人も出て行ってしまうため、今後町会がどうなってしまうのかと強い危機感を抱いている。

(上野委員)

マンション住民が増えると町会活動に関わらない人が増えるのか。

(杉山委員)

ワンルームマンションの住人は、町会活動に関わることがほとんどない。戸建て住宅がマンションに建て替わると、戸数や人口が増えても町会費が入ってこない。
(上野委員)

町会の問題は墨田区に限らず全国共通の問題かもしれない。先ほどの木村委員の話にあったような新しいコミュニティのかたちと昔からの町会がうまく一緒にやっていけるといいのではないか。

(須藤委員)

曳舟中町会で活動しており、その地域で生まれ育ってきた。幼い頃と比較すると、世の中がものすごく便利になった。再開発が進んだことにより、京島地区でも 1 億円を超えるようなタワーマンションが建設されている。タワーマンションが建つと、町会がなくなってしまう。また町会の役員がいらないのも町会共通の悩みである。町会の担い手不足に対しては、小学校や中学校の P T A の会長さんに P T A を卒業した後に町会を手伝ってもらうなどの工夫をしている。

また盆踊りなどのイベントを行っており、子どもたちは喜んで参加してくれるが、新しく引っ越してきた人から苦情を言われることもある。町会や自治会が魅力的でなくてはならないと感じている。

(岸委員)

墨田区の亀沢で生まれ育って 60 年以上が経つ。建築の設計をやっており、文京区で事務所を構えている。北斎通りまちづくりの会は、亀沢に住んでいなくても北斎が好きであれば入れるため、地域で縛りがあるコミュニティと好きなことで繋がるコミュニティがうまく具合に合わさったような組織である。また 4 年前から亀沢四丁目の副町会長もしている。大都市東京で景観まちづくりをどのように進めるのかと考えている。

北斎に関わっていく中で、江戸時代から本所エリアと弘前市に強い繋がりがあることが分かってきた。弘前の上屋敷が北斎美術館の建設地だったことに加え、弘前の方たちが幕府に言われて本所エリアのまちづくりを担っていた事例がある。北斎祭りでも弘前からねぷたを持ってきて両国から錦糸町まで運行する。自分の住んでいるまちとほかのまちの繋がりがあるとそこからいろんなものが膨らんでくる。

(上野委員)

ねぷたは今年も開催するのか。

(岸委員)

今年も 10 月に開催する。弘前市が所有している大きなトレーラーで 8 メートルのねぷたを運んでくる。

(木村委員)

ワークショップでは、このまちは便利だと言うが、防犯の面が不安だという声が多く聞かれた。南部地域でそういった話は聞くか。

(岸委員)

南部には繁華街があるため、そういった声もある。行政はどうしても区全域で考えがちだが、北部と南部ではまちなりたちや構造が異なるため、もう少しきめ細かく地域の特性を拾ってもらう必要があると感じている。

(金谷委員)

町会のなり手はいるか。

(岸委員)

私の町会は45人ほど幹事がいる。マンションを建てる際の協議会に4人の町会長に必ず出てもらい、景観まちづくりなどに関する質問を行うが、最後に必ず町会加入はどうするのかと聞いている。入居者個人が入らない場合は、事業者として入らないかという話をしている。幹事の半数近くはマンションの居住者である。

(須藤委員)

町会の役員の方で事業をやっている人はどのくらいいるか。また役員会はどのように開いているのか。

(岸委員)

1/3くらいかと思う。中には他区や県外まで勤めている人もいる。役員会は月に1回、夜7時から開催している。

(金谷委員)

京島で設計事務所をやっている。それに加えてまちづくり協議会の副委員長と町会長を務めている。もともと曳舟駅前のマンションに住んでいたが、高架化に伴い好きな京島に移り住んだ。今のところに住み始めて15年くらいになる。23年前に本所で設計事務所を創業し、その後両国、京島と移ってきたが、それぞれ魅力的な場所だった。当時両国まちづくりの会で地区計画をつくる計画があったがうまくまとまらずに分散してしまった。地元の町会とまちづくりの会が一体にならないとうまくいかないことを実感した。

両国まちづくりの会の方に「京島っていいね。道が曲がっていて面白い。」と言われたことが印象に残っている。一方で水害などの災害に弱いという面もある。いろんな見方があるが、実際に京島に住んでいて、またまちづくり協議会や設計をしている立場からすると、何かあったら怖い。能登半島の地震などを見てもそう感じる。何かあると取り返しのつかないことになるので、そこを何とかしたいと感じている。

(佐藤委員)

菊川三丁目に約20年住んでいる。勤めていた頃は地元を見る機会がなかったが、独立を機に地元がみえるようになった。息子を小さいときに亡くした。子どもを亡くした親の気持ちが非常につらかったことから、子どもの事故がない地域になってほしいという気持ちが強い。近年、頻繁に起きている子どもの転落事故に対しても自治体に対策を講じてほしいと感じる。防災面では、木密地域などの地域特性に合った防災対策を考えてもらいたい。東京都の補助金でスタンドパイプが助成対象となっているが、スタンドパイプよりも簡単で有効な製品もあるかと思うので、そういったものが補助対象となるよう検討してほしい。町会については、例えばワンルームマンションを建てる際に、自治会に入ることを約束させるような条例などの仕組みがあるといいのではないかと感じた。

(山本委員)

40年前に仕事で墨田区のまちづくりに関わった。この区役所ができる前で、亀沢に鉄鋼の工場がまだあった頃である。当時、すみだファッションタウンという産

業に関する将来ビジョンを議論していた。墨田区は町工場と小さな商店や住宅が混在してきた。いろいろと問題を抱えているが、それを特徴として大事にしていこうという共通認識を打ち出した。防災まちづくりでは、白鬚地区に逃げないで済む一寺言問のまちづくりに関わった。幹線道路沿いを延焼遮断帯にして、運命共同体のコミュニティ（防災生活圏）を形成するという明確なビジョンがあった。

今日の話では、墨田区のものづくりの伝統は持ちながらも、暮らしの場をどうつくっていくのかという点が強調されていたと思う。また、コミュニティ政策において町会をどのように位置づけるのかも重要な論点である。ただ、高齢化や担い手の問題は、墨田区だけに限らずどこも同じような悩みを抱えている。その問題を墨田区としての将来ビジョンにどうやって結び付けて議論していくのが重要だ。

これまでは関東大震災や戦災のトラウマがあり、安全といえば不燃都市づくりに集中してきたが、インバウンドによる外国人が増え、古くからの住民ばかりではない中で、防犯や不安感という心の問題を合わせて考えていく必要がある。

地上げによる空き地の話があったが、公共施設の跡地など限られたオープンスペースを地域の財産として捉え、防犯・防災などの地域活動にどのように活用・更新していくのかについても、今後議論していく必要があると考えている。

以下、各委員による意見交換

（木村委員）

先ほど佐藤委員から子どもの話が出たが、最近の特徴として、子どものメンタルの問題が大きくなっている。私も小5の子どもがおり、メンタルが落ちてしまった時期がある。精神科に行こうとしたが、精神科の予約がいっぱいで半年待ちの状況であった。母もコロナのダメージが大きく、鬱になってしまった。メンタルがマイナスになっている状況をどのようにコミュニティやイベントで補っていくのかという視点もまちづくりの視点に入れたいと感じている。

（須藤委員）

子どもに対する防災を町会でもやっている。芝浦工大が防災遠足なるものを開催しており、子どもからお年寄りまで災害があった際にどう避難するのかを考える機会を提供している。避難先の白鬚団地には放水銃がついており、2万人分の水やトイレが備蓄されている。また小学校単位でも防災訓練をしている。子どもの防災に関する知識は向上しているのではないかと感じる。先ほどスタンドパイプの話が出たが、すべての町会自治会にスタンドパイプを配布している。また各町会でも毎年防災訓練をしており、消火器の訓練などを行っている。

（岸委員）

先ほど白鬚の防災団地の話があった。私も何度か見学に行かせてもらっている。大きな門があるが、あの門はいったい誰がどのタイミングで閉めるのかいつも疑問に思っている。どんなにいいものをつくっても、100%大丈夫というものはない。もし今東京で私たちが経験したことのないような何かが起きた際、いろんな問題が出てくると思う。ハードの面もあるが、避難所や医療の問題をはじめ、様々な問題が起きると思っている。そうしたことをもっと議論していかなければならない。

(須藤委員)

小学校の備蓄倉庫の中を見たことはあるか。

(岸委員)

自分の町会はどこに逃げるべきか理解しているが、1番心配なのは、避難所がどういったシステムで開設されて、どういう風に運営されていくのかといった点である。

(須藤委員)

避難所は大震災が起きて、自分の自宅に住めなくなった人が行くものであって、キャパシティも1000人くらいしかない。全員逃げ込んでも入れない。避難所であって避難場所ではない。

(上野委員)

そのあたりのところは、区の専門の方に一度説明してもらったほうがよいか。

(須藤委員)

防災拠点会議には防災課から必ず一人入っている。今までは洪水のことについて検討されてきていなかった。洪水が起きた場合、1階にある備蓄品は全てダメになってしまう。ハザードマップなどを確認し、備蓄品が上層階にある避難所に逃げる必要がある。

(金谷委員)

京島の話を見ると、避難所と避難場所が分かれている。京島の第四吾孺小学校が避難場所、都営団地が避難所になっている。2019年の台風19号が来た時、一時避難場所に避難した。その後知ったことだが、墨田区北部は避難所がないため、水害の時にはここには避難せず、南部か近くの親戚のところに避難してくれと言われた。いろいろな災害があって、それらの整合性が取れなくなっている状況にある。南部に行ってくださいと言われても、何度か繰り返されるうちに避難しなくなることは目に見えている。その前に、根本的に何かを考え直さなくてはならないのではないかと考えている。避難所とか白鬚団地とか、昔は大きくて堅いもの燃えないものをどーんと造ってという考え方があったが、だんだんそうではなくなってきたのではないかと。マンションは逃げなくてもいいが、戸建てであっても大丈夫なような造り方をしようと思えばできるし、水害で5mなどと言っているが、国交省の浸水ナビなどを見ると、実際には5mというのは滅多にない。そうすると、2階建て1階部分を少し高くするとか、3階建てだったら一時避難などができる。そのあたりをもう少し真剣に考えるなど、今までと違う方法を見つけていく必要があるのではないかと。

(木村委員)

ワークショップの中でも、防災に関することは評価が高かった。先ほどお話にあったようなところはすでに十分やられているかと思う。どちらかと言うと、能登半島地震などを見てインフラに対する漠然とした不安を感じているところが大きい

	かと思う。墨田区のまちづくりとして、どのような指針を出していくのかというのが問われていると思う。 (上野委員) 先ほど山本先生が生活圏などのお話をされていたが、地域活動はまさに生活圏をどうしていくのかといった問題である。それからこれまでの町内会のようなかたちでやっていけるのか、また違うかたちでしていくのかという話が岸委員からあった。今度の8月22日の部会ではそのあたりのことをお話させていただければと思う。まだ皆さん話したいことがたくさんあると思うが、今日のところはこの辺にさせていただきたい。 (事務局) 行政の中でこの部門の話が聞きたいなどの要望があれば調整させていただく。 (上野委員) それでは、これにて解散。
所 管 課	企画経営室政策担当（内線3722）